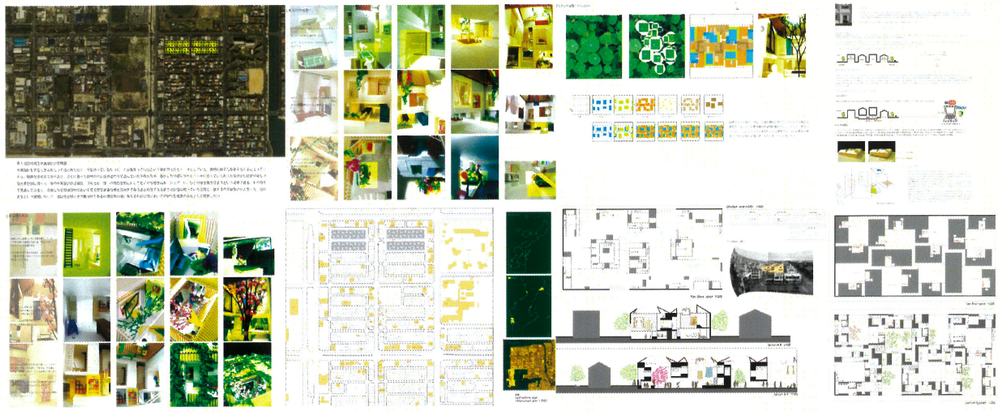
団地再生卒業設計賞 奨励賞

「四角いこもれびの中で集まって住む」
--------風景の再生---------」

村田　裕紀
琉球大学



この作品は沖縄の戸建て住宅地の一角に計画された低層集合住宅である。各住戸は３階建てで、二、三階は私有空間であるが、中庭を中心とする一階は、私的に使われながらも、コミュニティに解放され共有されるという。しかも、この中庭は南国的な雰囲気を濃厚にたたえている。脱色された集合住宅計画が多い中で、１９７０年代の屋根瓦の載った公営住宅以来絶えて久しい、地域色が際立った提案である。惜しむらくは、団地再生というテーマとの関係が希薄なことである。周辺の戸建て住宅との関係を計画に取り込められればもっと評価は高かったであろう。

概評
内田 祥哉

今回は、老朽団地に対する関心の強まりもあり、また、回を重ねているので、応募者への周知範囲が広がったと予想していたのであるが、様子を知らない応募者が多いという印象をうけた。中には、再生ではなくて、全くの新築の応募案もあったので、それらは審査対象から外さざるをえなかった。

審査レベルは、ますます厳しくなっているが、今会の応募案には、これまでにない力作もあり、新たな魅力を持ったものも見つかった。

第五回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 / 団地再生産業協議会

協賛：東京ガス　株式会社
　　大阪ガス　株式会社

団地再生卒業設計賞 内田賞
圓木　裕基　（横浜国立大学）

団地再生卒業設計賞
陳　毅哲　（東京大学）

団地再生卒業設計賞 奨励賞
足立　理紗　（昭和女子大学）
村田　裕紀　（琉球大学）

応募期間：2007年12月上旬～2008年3月31日（月）
審査委員：審査委員長　内田　祥哉（東京大学　名誉教授）
　　審査委員　大野　秀敏（東京大学大学院　教授）
　　北山　恒　（横浜国立大学工学部　教授）
　　木下　庸子（工学院大学　教授）

応募登録数：17点
応募作品数：15点

団地再生卒業設計賞 内田賞

「Re:scape」

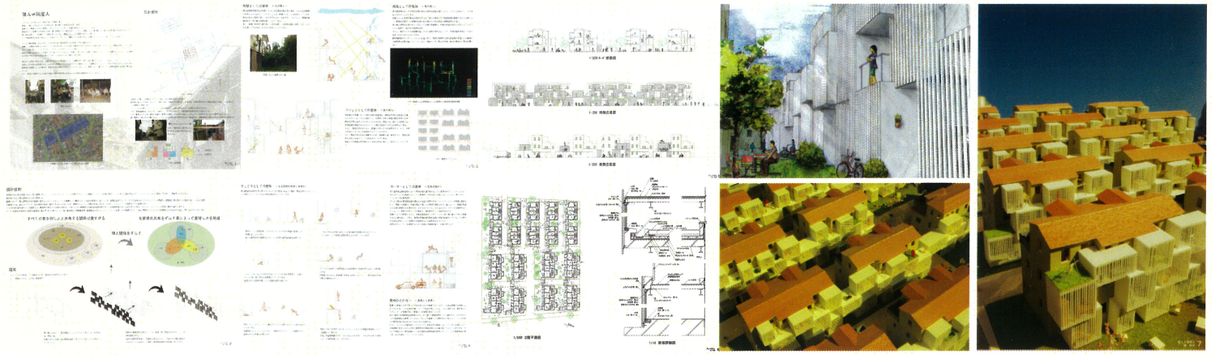
圓木　裕基
横浜国立大学

かつて団地は冬至における４時間日照の確保を住戸計画の指標として、住棟ごとの隣棟間隔が割り出され、それが団地の配置計画と風景を大きく決定づけていた。この提案の魅力はなんといっても、現存する多摩ＮＴの諏訪団地の配置を否定することなく、むしろ逆手にとって未だ誰も見たことのない全く新しい団地景観を創り上げていることにある。「布で覆う」という概念から生まれたアモルファスな外皮の内側及び外側と、既存住棟との間にできる新たな空間を巧みに利用しながら、住人のための共用施設やＳＯＨＯを、既存の住宅も一部活かしながら団地再生を行った力作である。平面もかなりしっかりと計画されているが、欲を言えば共用空間に転用される30%の既存床がどのように生まれ変わるのかをもう少し詳細に図示してもらえたなら、再生としての実感がより一層伝わったに違いない。別の見方をするならば、そこまで詳細を理解したいほど興味を引かれる提案なのである。ただ、外壁補強の理由で均質な南北団地立面を一新しようという意図は理解できるものの、過去の均質なファサードと新たに設けられる多様な開口部を持つファサードとの関係が読み取れず、単なる外壁の「化粧直し」に見えてしまうことが少々残念に思われる。

団地再生卒業設計賞

「隣人≠隔壁人」

陳　毅哲
東京大学

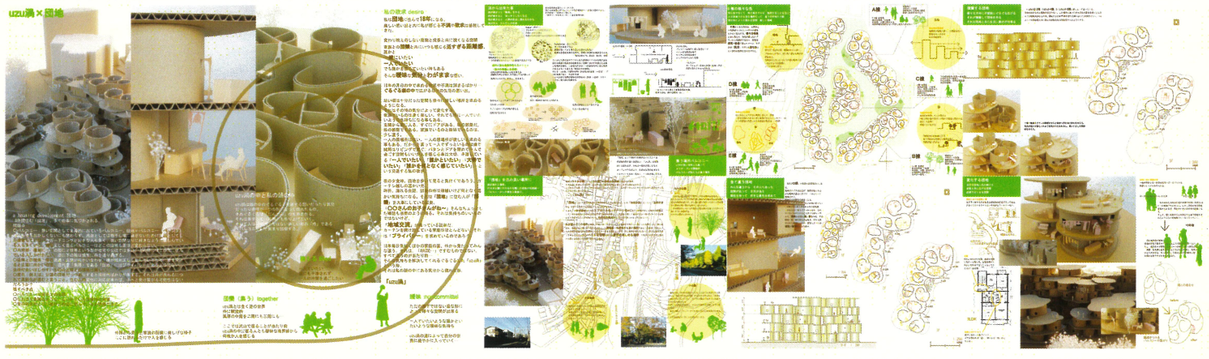


いつの時代も都市は更新されていく。それは社会というものが不変ではなく社会システムが変更されれば、その容器としての都市も変更していく。「里弄」も、もともとは1棟1世帯の住宅として建てられたものが、1棟あたり3，4世帯収容する使われ方となっていた。そのため住居のパブリックな活動はその外部空間である「弄堂」が対応していた。このやむを得ない使用から、世帯を越えた強い共同体が発生している。そんな現状を評価し、ソフトウエアを調停するささやかなハードウエアの提案となっている。作者の都市の生活者や共同体に向ける眼差しはJ.ジェイコブスのように批評的である。提案されるささやかな建築的ユニットが有効かどうかという事を越えて、上海という都市が壮大な都市改造を行っており、それが誰のためなのか、という問題が提起されていることを評価したい。

団地再生卒業設計賞　奨励賞

「uzu渦×団地」

足立　理紗
昭和女子大学



「板状の南面平行配置」という住棟形式と「nLDK」という住戸形式といった、昭和30年代、40年代の団地の設計手法を根本から提案し直そうという、団地に対するアンチテーゼともいえる案である。この案になぜかとても引きつけられる魅力を感じるのは、作者が18年間団地に住み、そこで育ったという生活体験を自らが分析した上で、集落の原型に到達し、「渦」という形態にヒントを得てまとめあげられたものであり、その中に実体験をベースとした生活が読み取れるからではないだろうか。団地の住戸には必ず存在するバルコニーにも新たな形態と機能を与え、積極的に生活の一部として取り込む提案をも行っている。ただし、バルコニーにはみ出した生活機能の一部は外部空間では成立しにくいものもあり、外部空間と内部空間の区分がわかりにくいのが残念である。これは既存団地の建替えではないものの、「団地」という確立された建築計画のモデルに新たなプロトタイプを与えようという試みが評価され、奨励賞を獲得した。